

浪江の こころ通信

・第40号・



平成23年3月11日に発生した東日本大震災、そして福島第一原子力発電所の事故により、福島県内外に分散避難した浪江町民。長期化する避難生活、先の見えない不安の中で、町民の皆さんがどのような思いで生活し、ふるさとへの思いを抱いているのか。

こうした町民の思いをつなげるために、“浪江のこころプロジェクト”が立ち上げられました。一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアム(※)が中心となり、全国各地のNPO、大学等の皆さんが取材を進め、浪江町との連携のもと「浪江のこころ通信」が編集・発行されます。

浪江のこころプロジェクトは、分散避難している町民の皆さんの声を「浪江のこころ通信」を通してお届けし、ふるさと浪江町がかつての暮らしを取り戻すことへの願いとこだわりを発信・共有しようとするものです。

※一般社団法人東北圏地域づくりコンソーシアムは、東北圏(7県)の地域コミュニティ再生や協働のまちづくりの推進を目的として、大学、NPO、企業、経済団体、行政等が連携したコミュニティ支援ネットワーク。仙台が本拠地。

再取材シリーズ

再会・浪江のこころ

これまで取材を受けていただいた皆さんに、再度の取材を行うコーナーです。

3・11から3年以上が経過した今、感じていること、伝えたいこと、そして最初の取材以降の気持ちの変化やふるさとへの思いなど皆さんの声をお届けします。

「浪江のこころ通信／第40号」への感想をお寄せください。

【連絡先】〒964-0984 福島県二本松市北トロミ573番地
「浪江のこころ通信」宛
FAX.0243(22)4218





亀田 和弘さん・玲子さん(樋渡)

取材者：NPO法人ちば市民活動・市民事業サポートクラブ 鍋嶋
取材日：9月1日

思いは浪江に。迷いながら前へ進む。

亀田さん一家は、友人を頼って震災後すぐに千葉県君津市に避難、8か月後に、現在住んでいる佐倉市の借上げ住宅に引っ越してきました。和弘さんのお父さんは、一時、姉家族と一緒に新潟に避難しましたが、福島での暮らしが良いと、今は福島市の仮設住宅に一人で暮らしています。玲子さんのお父さんは、亀田さんたちの家の近くのアパートで一人暮らし。二人とも元気で、身の回りのことは自分ででき、マイペースな暮らしを楽しんでいる様子です。



▲愛犬のゆずちゃんと亀田さんご夫婦

■復興支援員になって
震災前はスーパーを営んでいましたが、佐倉市に来てしばらくしてから、造園業補助の仕事に就きました。身体を動かすことが好きでしたから仕事は苦にはなりませんでしたが、10kg近く体重が減り、以前の知合いには、どこか身体が悪いのではないかと心配されました。2年半仕事を続けた今年の春、妻の玲子さんから、浪江町の復興支援員募集の話聞き、軽い腰痛があったこともあり、少しでも町の役に立てたらとの思いで転職を決めました。仕事を始めて

半年、スーパーのお客さんだった人との再会など、支援員になって良かったと思うことが増えました。が、震災により、慣れない土地で話し相手もなく暮らすお年寄りや仕事のこと、住まいのこと、自分では解決できない大きなものを抱えて暮らす町民に相対すると心重くなりました。地域の保健師さんにつないだり、情報収集したことを伝え、少しでも良い方向へ進んでもらえたらと願って仕事を毎日です。

■暮らしを再建
震災の時は1歳半だった孫は4歳になりました。震災後に生まれたもう一人の孫は浪江のことを知りません。千葉に避難して3年半あまり、子どもたちや孫たちが帰って来て、くつろげる場所を作ってあげたい、と思うようになりました。「思いは浪江にあるけれど、暮らしを再建しなくてはならない時期」です。私たち夫婦は、佐倉市で家を建てることを決めました。迷いながら前へ進む日々が続きます。



漆原 恒男さん・トシ子さん(西台)

取材者：浪江町役場 舛田・嶋原・中川
取材日：9月3日

浪江の人たちといると心が和みます

恒男さんは浪江のご出身。南相馬市原町区にある建設会社にお勤めでした。南相馬生まれのトシ子さんは、卒業後に東京で13年間仕事をし、福島に戻って恒男さんと出会いました。「私たちの子ども」とおっしゃる動物たちとともに、現在いわき市内の借上げ住宅にお住まいです。



▲避難中もずっと苦楽を共にしている猫のミルクちゃん、犬のもみじちゃんと。2匹とも幸せそうです。

■避難先では人に恵まれて
ご自宅が西台のため、津波被害の甚大さは翌朝まで知らなかった、というお二人。避難指示が出た後は、恒男さんの仕事の関係もあり、多くの浪江町民とは別のルートで避難しました。昨年11月に現在のいわきへ移るまでの2年8か月、原町区↓新潟県小千谷市↓再び原町区↓二本松市↓長野県松本市と居を移してきました。
トシ子さん「小千谷では『中越地震のときの恩返し』ということで、救援物資も豊富で、大変良くしていただきました。その後、主人が会社で行方不明者捜索に協力するため原町に戻り、

私はボランティアで、津波被災地で見つけた写真をきれいにして掲示する仕事などに携わりました。そこで松本から支援に来ていた方と知り合い、誘っていただいたのです。
恒男さん「松本では、思いやりのある方々に囲まれて最高でした。空気もよく食べ物もおいしい。すばらしいところですね。そこで新たな仕事に就いたのですが、慣れないこともあって体調を崩し、ほどなく引退しました。松本はとても気に入って2年半ほど暮らしましたが、やはり浪江からは遠い。西台の家はネズミ害などで住めない状態ですが、それでも我が家です。頻りに手入れしに帰れるよう、浜通りへ戻ることになりました」
■いまの暮らし
引退されたとはいえ、お二人はとても活動的です。恒男さんは釣りやパークゴルフを楽しむほか、朝晩犬と散歩するのが日課。1日15,000歩が目標だそうです。
トシ子さん「松本時代に始めたブリザーブドフラワーのサークル仲間が、先日ここ(いわき)を訪ねてきてくれたんですよ。だから次は私が会いに行く予定です。たまに東京に行くと、会社員時代の友人と会うこともあります。一本松の仮設には姉が、南相馬には兄がいますし、

浪江にもよく帰りますから、家にはほとんどいませんね(笑)」
■「帰りたい」と「帰れない」の間
浪江は日本で一番いい町、というお二人は、3年後に本当に帰れるのか疑問が拭えず迷っている状態だといいます。
恒男さん「周囲には(指示が解除されたら)すぐ帰るといふ人もいるし、もう他所で家を買った人もいます。一方、帰れるようになったら(建てた家を)売って帰るといふ人もいます。復興公営住宅も遅れているし、ペットがいる世帯は中でも後回しなのではないか。私たちが家を建てたほうがいいのか、悩んでいます」
トシ子さん「浪江は自然が豊かでした。毎日請戸の市場で新鮮な魚を買って、ご近所の人たちとおしゃべりして。そういう普通の暮らしを取り戻したい。でも、津波被災地でボランティアをしたとき思いました——家は流されても、人が残っていれば必ず再興できます。松本では主人の運転中にもらい事故に遭い、私は大ケガをしました。死ぬかと思いましたが、今こうして生きています。それは、まだやり残したことがあるということ。悔しいことも心配ごともたくさんありますが、日々をしっかりと生きていきたいですね」



坂本 銀子さん(川添)・志賀リエ子さん(室原) 原下ヨシ子さん(北幾世橋)・原中セイ子さん(権現堂)

取材者：NPO法人市民公益活動パートナーズ 古山
取材日：8月26日



仮設住宅での毎日を、お互いに助け合い、 励まし合いながら

伊達郡桑折町の桑折駅前応急仮設住宅にお住いの女性たちにお集まりいただきました。

みなさんは、手芸などを通じて、浪江町や避難先の桑折町の方々と共に元氣と潤いを分かち合うことを目的に、2012年3月に結成された市民活動団体「コスモス手づくりの会」のメンバーです。会の名称にもあるコスモスの思い出からお話しが始まりました。



原下ヨシ子さん
棚塩の農家で、目の前には鮭の築場もあったそうです。今はご主人と愛犬コロと暮らしています。



坂本銀子さん
新潟生まれ。東京で結婚し、退職を機にUターンをしたご主人に付いて、浪江町に来られたそうです。

◆浪江のコスモスが咲く風景で、一番のお薦めはどこですか

坂本 コスモスや月見草は、浪江町のどこでも見られました。特に河川敷や県道の傍には、たくさんありましたよ。私は新潟に生まれ、東京で仕事をしていて結婚し、主人の退職を機に浪江町で暮らし始めました。請戸への道沿いのコスモスは町へ来て初めて見たので、とても印象が強いです。

志賀 苜宿の道路や減反跡地にコスモスがたくさん咲いていました。浪江高校からずっと、苜野郵便局や農協まで続いていますね。それと、毎年10月に行われていた「浪江町コスモスマラソン」のコース沿いのコスモスは見事でしたね。
原中 あちこち、減反した跡で

見かけましたよ。大堀へ行く途中の道沿いにもありましたね。
志賀 114号線沿いも綺麗だったですよ。

原下 幾世橋小学校の辺りもたくさんありましたし、学校から浜街道への沿道も。
浪江は花好きの人が多いのか、家の周りで育てていました。ご近所も、自分の家から隣に向かって増やしてましたね。花と言えば、酒井の水仙も綺麗でした。

◆秋の請戸川の鮭の遡上はよく知られていますが、みなさんの思い出はありますか

原下 家の田んぼを挟んで直ぐ前に、高瀬川(請戸川)の築場がありました。
志賀 橋の下に鮭がたくさんいるのが見えるんですよ。4年に1度戻って来ると言いますか

ら、今年辺りは食べられるのかしら。榎葉辺りでは、ハンバーグを作っていると聞きましたよ。
坂本 震災の時にも戻ってきた鮭を見ました。上まで登ってくと聞いていますから、室原川のダムくらいまで来てるんじゃないかな。

志賀 鮭をとる人たちの組合が川原にテントを立てたりして、鮭ごはんや鮭のアラや大根、蒟蒻が入った紅葉汁、漬物などを出していました。鮭が戻ってくると、お祭りみたいなものですよ。大堀の瀬戸焼の店が出たり、食堂も開いて、賑やかでした。11月3日頃までは、観光バスや一般の車もびっしりでした。
原下 うちには組合に入っていたので、11月に入ると鮭が配給になりました。子が入っていない雌は味噌漬にして食べていました。切り身を干して醤油漬にしても美味しいのよ。

そうそう、あの魚を干す網は重宝しますね。サツマイモを干したり、切り干し大根を作ったり、いろんなことに使いましたよ。こっちはあまり売っていないけれど、秋刀魚の一夜干しも作ったし、本当に利用価値がありました。

原中 私は、イクラの作り方を覚えたばかりだったのに、震災になって避難して、しばらく作れないし、食べられないのは残念です。

そういえば、9月〜10月頃にニンニクを仕込んで、冬から春先に作る「ニンニクの葉の味噌炒め」は、浪江の一番のご馳走ですよ。
志賀 ニンニクの葉を間引きして作るのだけど、凍み豆腐なんかも入れても美味しいわよね。この中通り辺りには、玉ねぎの葉はあるけれど、ニンニクの葉はないですよ。若いうちは葉が柔らかいので、本当に美味しいですよ。何にもない春先によく食べるのだけど、早ければ年内に食べられます。

坂本 志賀さんの旦那さんは野菜を作って、仮設のみんなに

配ってくれていますよ。とにかく新鮮なのが、本当に嬉しいですよ。

志賀 何だか、何もかもが遠い昔になってしまったようです。いろいろ工夫したり、山菜採りもしたり、本当に懐かしい。それにつけても、田んぼは元に戻すまでかなりの年月が要るでしょうね。

◆さあ、これからどうされますか
原下 平成29年の帰町まであと3年ですけど、家に帰れるまで身体が持つかしら。帰ったとしても、どこから手を付けたらいいのかかわからないですね。田畑は柳や野ばらの林になってしまっているし、猿も猪も出るらしいし、片づけをしようにもゴミも出せないんですよ。でも、人が帰らなかつたら、

浪江はどうなるのでしょうか。

原中 医者とお店、飲料水がなくなっちゃ帰れないですよ。原ノ町の病院も、待ち時間がかなり長いつて聞きますよ。
志賀 東京オリンピックもあるし、広島なんかの自然災害もかなり酷かったですよ。これ以上いなるんことがあつたら、被災地なんて忘れられてしまうと思いますよ。私はここで骨を埋めるしかないんじゃないかな。

坂本 来年になったら少しは目途が付くんじゃないかしら。一人暮らしの高齢者の入居は難しいようだけれども、私は桑折の復興住宅に入りたいと思っています。抽選に当たればの話ですけど。でも、浪江に帰れるようになったら早く帰りたいですね。
原中 それにしても、桑折に避難して、コスモス手づくりの会に入って、手作りで何でも出来るようになって、本当に良かったですよ。本を見たくらいではなかなか出来るものじゃないし、これまでは時間もなかったです



志賀リエ子さん
室原で酪農や野菜、米の農業を営んでおられました。桑折の仮設住宅のお隣には、息子さんたちがお住まいです。



原中セイ子さん
権現堂でクリーニング店を営んでおられましたが、今はご主人と二人で暮らしています。

人に先生が来て教えてくれるのって時々聞かれるけれど、坂本さんが何でも出来るから、心強いです。



▲対談中のみなさん 右奥から時計回りに、原下ヨシ子さん、坂本銀子さん、志賀リエ子さん、原中セイ子さん

坂本 町にいたら知り合っていないなかつたかもしれない人たちと仲よく活動が出来るのは、ありがたいことです。これから桑折の復興住宅に入る人も、何処かに引っ越す人もいるかもしれないけれど、このつながりは大事にしたいですね。